

信じるということ

代務牧師 齋藤 篤

聖書 創世記15章1～6節

「これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」²アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」³アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださりませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」⁴見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」⁵主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」⁶アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

のちに「アブラム」という名前が神によって与えられたアブラム。そのアブラムが神との出会い、そして、その出会いのなかで、彼は何を神から与えられたのでしょうか。先ほど私たちに与えられた創世記15章の言葉から、ともに考えてみたいと思います。

創世記15章は「これらのことの後で」(1節)という書き出しから始まっています。では、「これらのこと」とは、いったい何なのでしょう。私たちは今日の聖書箇所の前にある、創世記14章に注目することができます。ここでは、諸国の王たちが戦いを繰り広げたことが記されていますが、それよりも私たちが関心を引きたいのは、アブラムの甥であるロトとその一族に起きた出来事についてです。

かつて、アブラムとロトは一緒に行動をしていました。しかし、それぞれの一族が互いに平和な生活を営むことができるように、それぞれ別な所に住もうという決断をします。アブラムもロトも遊牧民であり、彼らが所有する家畜を飼うための土地が足りなくなっていました。それで、互いの羊飼いの間で争いが起きるようになったのです(創世記13章)。

ロトは、とても潤っていた場所であったソドムに移動し、居を構えました。そしてアブラムはソドムとは別方向のカナン地方へ移動したのでした。そして、それぞれに生活を営むことになりました。おそらくロトは、ソドムという経済的にも社会的にも繁栄していた街で、幸せに暮らしていたことでしょう。一方で、アブラムは以前と変わらず、遊牧民として家畜たちの食べる草を求めながら、移動する生活を営んでいました。

しかし、そんなロトの生活にも陰りが見え始めます。先ほども申し上げた通り、彼が住んでいたソドムを含む土地で、王たちが争いを始めました。その結果、ロトは「財産もろとも連れ去られた」(14章12節)と、その時のことを聖書は伝えています。つまり、ロトは生活するための手段をすべて失ってしまったこととなります。

そこで、ロトのおじてあったアブラムが登場します。アブラムは、ロトの財産を奪い取った軍勢を追跡して、彼の財産を取り戻すことに成功します。こうしてロトは、アブラムのおかげで不自由になることなく、再び裕福な生活を営むことができたのでした。

ここで大変興味深いのは、ロトを助けたアブラムは、誰からも一切の見返りを求めなかったということです。財産を取り戻したロトからも、結果として助けられたソドムの王からも、アブラム自身は一切の金銭などの見返りを要求することはありませんでした。しかし、アブラムとともに戦った若い者たちには、それなりの分け前を与えて欲しいと、アブラムは王に頼みました。

私は、この出来事を読むと、アブラムは何と無欲な人物なのだろうと思ってしまいます。少くも分け前があることを期待しても良いのではないかと、私などついつい考えてしまったりするのです。しかし、アブラムはそういうところには立っていません。もう神から十分に裕福にさせられているし、そもそも、生きるために必要な財産は、神が備えてくださるという確信が彼にはありました。そう、彼は無欲なのではなく、神がご自分の正しさをもって、人間を、そして私たちを取り扱ってくださるという思いが、神に向けられていたのです。

前置きが長くなりましたが、このアブラムの取った一連の行動こそが、本日の聖書の言葉の冒頭にある「これらのこと」なのです。そして、これらのことの後、神がアブラムにこのように語りかけられました。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」(1節)あなたの受ける報いは非常に大きいであろうと、神はアブラムに語りかけられたのです。見返りを求めないアブラムの姿に、神はさらなる報いがあることを宣言されました。

アブラムは、すでに神から十分な報いを受けていました。しかし、そんなアブラムにも、思い当たる節がありました。彼は神から、いまだ受け取っていない「祝福」があったのです。アブラムはそのことを神に告げました。このようにあります。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」(2節)

当時の神の民にとって、神が与える祝福は主に3つありました。ひとつ目に土地、ふたつ目に家畜、そしてみつつ目は子ども、つまり子孫でした。そして、これら3つの祝福のなかでも、土地についても家畜についても、それをあとに継がせるためには、やはり子どもが与えられること。つまり、後継者が与えられることこそ、最大の祝福であったと言えるのです。

それで、アブラムとその妻サライ(のちのサラ)との間には、子どもが与えられていませんでしたから、アブラムは神に対して「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか」と問い尋ねたのでしょう。しかし、アブラムによって神に語られたこの言葉は、決して神に対する不平不満の表れではありませんでした。どうしてそう言えるのでしょうか。

実は「わが神、主よ」という、アブラムによる神への呼びかけの言葉こそ、アブラムの神に対する深い信頼を表すものだったのです。アブラムにとって神は、「わたし」にとっての「主(あるじ)」であり、そのあるじである神は、私とともにいてくださる方であるという意味を表しているのです。この言葉は、原語であるヘブライ語で「アドナイ・ヤーウェ」という言葉が用いられていますが、この言葉を直訳しますと「『わたしはあなたと共にいる』という名前である、私のあるじよ」という風に少々回りくどいですが、訳すことができるのです。

つまり、アブラムにとって、神はわたしといつともいてくださる、私のあるじに他ならないという存在でした。このアブラムの姿勢に、神はご自分の報いをもって応えられるのです。

子どもが与えられなかったアブラムに、神はこう告げられました。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」(4節)と。明らかに、アブラムと妻サライの間から子どもが与えられ、その子どもがアブラムの後継者となることを、はっきりと神は宣言したのでした。

これまで子どもが与えられなかったアブラムにとって、自分の後継者となるのは、自分の家来であるエリエゼルであると思いつけていました。財産を管理するための後継者は確保できたとしても、それはアブラムに子どもが与えられなかった結果としてそうなるのであって、本来の跡継ぎのかたちではなかったのです。

だから、アブラムはこう神に告げたのでした。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています」(3節)。アブラムは神を心から信頼していました。だからこそ、心のどこかでは神から与えられないという事実に向き合おうとして、今ある現状で満足しようという思いがあったのかもしれませんが。神に不平をもらすことのないアブラムの態度こそ、まさに神を信頼していた証であったと言って間違いのないでしょう。

そのようなアブラムの態度に、神は報いを与えます。あなたに子どもが与えられる。そうアブラムに告げた神は、アブラムを外へ連れ出します。そして夜空を眺めさせました。そこには、満天の星が光輝いていたのでした。神はアブラムに語られたのです。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる。」(5節)

この時点で、アブラムは神の言葉を実感することはまだありませんでした。しかし、神は定められた時に必ず、ご自分の計画に基づいて、アブラムとサライの夫婦から、子どもを宿し、そして生まれ、後継者として、神の民イスラエルの基礎を着実に作りあげていったのでした。信頼というものは、すぐに実感できなかつたとしても、そして時には、確信が揺らぎ、疑ってしまうようなことがあったとしても、しかし、最終的にはなんとかあるところへたどり着く思いから生じるものであり、それを神がご自分の正しさをもってなしてくださるのだという、アブラムが抱いたような態度に相通じるものがあるのです。

その神の正しさこそ、人間を生かし続ける原動力となります。創世記15章6節には「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と書かれています。アブラムが主のなさることに希望を置く生き方を営んだというのは、「わたしはあなたと共にいる」という、神の言葉に対する確信ゆえのことでした。信じるとは、私たちのなかから生み出されるものではありません。神が私と共にいてくださる。つまり神が私のうちに存在してくださることによって、神が生み出してくださるものなのです。これを「内在する神」という言い方で表現することがあります。

つまり、信じるということ、つまり信仰とは神によって与えられるものなのであって、私たちの修業や努力の結果として生み出されるものではありません。そのことに基づいて、「主はそれを彼の義と認められた」という言葉の意味を問うならば、彼の持つ正しさは、神が内在してくださることによって、神の正しさによって、神の正しさに倣いつつ、アブラムというひとりの人間の人生が作り上げられるという意味を、私たちは理解することができるのです。

こうしてアブラムの信仰が、子や孫に、そしてイスラエル国民に継承されて、それはやがて、救い主イエス・キリストを通して教会の2000年間にわたる歴史に継承されて、今日の私たちひとりひとりに受け継がれているということを、私たちは大切にしたいのです。つねに神は、後継者を与えることで、ご自分の誠実さというものを、人間に伝え続けてきたのでした。

それは、この北三教会においても、まさしくそうであると言えます。信徒の高齢化が進み、若い人が少なくされている現実を見ると、本当にこの教会は将来にわたって立ち続けることができるのだろうか。そんな不安や惑いというものが、私たちを襲うかもしれませんし、今、専従の牧師がいない、つまり無牧の状態にあって、本当に私たちにふさわしい牧者が与えられるのだろうかという不安も、私たちの間で起きてくるかもしれません。それも、アブラムが感じた「後継者」の問題課題に相通じると言えるのです。

しかし、私たちには希望があります。神が私たちの内に共にいてくださるからです。神が必ずや、与えられないという現実には風穴を開けて、一筋の光を注いでくださるのです。この一点に、私たちはどれだけの希望を抱くことができるのでしょうか。神の正しさというものに、自分自身を沿わせながら、日々の営みを歩むことができるのでしょうか。それは、私たちひとりひとりに問われていることなのです。そして、問うた先には、私たちの神が必ずおられるのだ。そんなことを、私たちの希望としたいのです。

祈り

希望の与え主なる神よ。私たちは現実に目を移す時に、希望すら感じられない出来事があることを知っていますし、何よりもあなたがそのことをご存知です。だからこそ、主よ、私たちの内に入り込んでください。聖霊なる神が私たちに、あなたがともにおられることを気づかせてくださいますように。そして、希望を私たちの心の真ん中に立てて、日々を歩む者とさせてください。

あなたの御子であり救い主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。